（様式）提出用

園番号　７０９

令和４年度　奈良市立柳生こども園　研究実践概要

園 長 名　大原　美幸
全園児数　　１５名

１．研究主題

「豊かな自然環境に親しみ、子ども自ら驚き、感動し、友達といきいきと遊びこめる子どもをめざして」　～身近な環境や地域の人とのかかわりを通して～

２．研究年度　　２年度

３．研究主題設定理由

園児数が年々減少する中で地域に目を向け、地域の中で育つ子ども達と共に四季折々の豊かな自然に触れ親しみ、いろいろな経験を通して自分達が暮らしている地域に愛着を持ちのびのびとした環境の中で心豊かにたくましく育って欲しい、また、環境と自らかかわり、“どうなっているのかな？”、“もっとしてみたいな？”と子ども達の興味・関心の視点の先にある心が揺さぶられる“もの”や“こと”に保育者自身が思いを馳せてみることで子ども達と共に感性を豊かに高め合う保育を目指すが、少人数ゆえの保育の課題もある。その中で子ども達がひと・もの・ことと意欲的にかかわり、人とつながり合っていくことの大切さや思いやりの心、また、自己肯定感を育んでほしいと願い今年度の研究主題とした。

４．具体的な研究内容

①研究のねらい

・地域性を生かした取り組みを行い、地域の人とのふれあいを通して感動する体験を重ね、多様な経験から地元への愛着をもち、心豊かに自己発揮できる子どもの育成をめざす。

②研究の重点

・研究主題について、職員相互の共通理解を図り、具体的な取り組みの方法を探る。
・乳幼児の実態や育ちに即した保育内容や、環境構成のあり方を探る。
・地域の環境や人材を活かし、感動体験が積み重ねられるように保育内容を工夫する。

③活動の方法

２歳児　『わたしも、やりたい！』(３歳１か月女児)

《場面①》

地域の方に来ていただいて幼児組の友だちが運動遊びをしている。
幼児組の子ども達が園庭を駆け足で走っている様子をながめていたＡ児。その表情は自分もまるで参加しているような嬉しそうな表情である。「一緒に走ろうね。」と声をかけ、保育者と一緒に「いちに。いちに。」と掛け声に合わせて小走りで大きな子たちの後について駆け足を楽しむ。その日の活動は風車を作り、頭につけて風を受け回る様子を楽しむ内容で、子ども達は園庭を駆け回り喜んでいた。その様子をにこにこしながら見入るK児の表情は「わたしも、やりたい！」思いが溢れんばかりの様子で、思わず以前から遊びに使っていた風車を手渡すと大きな子たちの後を喜んで追いかけている。「すごいね！」「回っているね！」と声をかけながら楽しい雰囲気を一緒に味わうことが出来た。

２歳児のＡ児が楽しい活動の場面を共有し、「じぶんも！」と心が動いた瞬間に出会えた場面であった。

《場面②》
２月になり、おやつの後は異年齢児の部屋に行き一緒に過ごす日が増える。４歳児がＡ児のそばで遊びながらニコニコして見ている。保育者が思わず「かわいいの？」と４歳児に声をかけると「うん！かわいい！」とすぐに返事が返ってきた。その言葉とその場の雰囲気に心が温かくなった。

【評価・反省】
これらの異年齢とのかかわりを通してK児なりに一緒に過ごす空間の心地よさを感じ、幼児組の子ども達はいたわりや思いやりの気持ちが自然と育まれ、年齢の幅を超えて互いに刺激を受けあい、さまざまな人とのかかわりの中で情緒が豊かに形成され育ちあう過程をそばで実感できた。子どもと一緒に遊びながら“心の目線”も同じくして、まだうまく思いを言葉に言い表せない２歳児のその時の思い・心の動きを保育者は見逃さずに捉えて子どもの「わたしも、できた！」喜びと意欲につながるかかわりを今後も大事にしていきたいと思う。

３、４歳児　『おいも　いっぱいぬけたよ！』（３歳児２名　４歳児　５名）

地域の先生と一緒にさつまいもの苗植えをし、秋にはたくさんのイモを収穫することができた。「よいしょ！」「う～ん。ぬけない。」など言いながらつるを引っ張っていた。子ども達の力ではなかなか抜けなかったが、土を柔らかくしてもらうことで自分たちの力でも引き抜けるようになり、「いっぱい、ついてる！」とたくさんイモがついていることを喜んでいた。まだ土の中に残っているイモも「ここにまだあるよ。」と教えてもらい、手で土をかき分け「こんなに大きいのあった！」と喜ぶ子ども達。収穫したイモを新聞紙の上にのせていくと「いっぱいある！」いう声がでてきたので、数を数えてみることになった。並べていく途中で「これ、おおきい。」「小さいのもある。」など大きさの違いに気が付く。「どれが重たいかな？」と重さ比べをすることになった。一つずつ持ち上げて重さを確認しながらどれが重たいイモか探していた。後日、サツマイモを作ることになり、何で作るか尋ねてみると「新聞紙でイモの形にする。」「画用紙をちぎってはる。」など、答えが返ってきたので、サツマイモを見ながら新聞紙と色画用紙を使って作った。「このイモにしよう。」と作りたい大きさのイモを選び、新聞紙１枚で作り始めたが、選んだイモよりも小さくなり「どうしたらいい？」と声をかけると「もう１枚つかったらいいと思う。」「もう１枚使おう。」とさらに新聞紙を巻いていた。自分たちのイメージした形ができると画用紙をちぎって貼った。

【評価・反省】
地域の方に教えてもらい、一緒に収穫することで育てることの大変さや収穫する喜びを感じ取ることができた。つるを引っ張ったり、手で収穫した事で大きさや重さの違いに気付くことができ、野菜の生長の変化を感じることができた。実物を見て触ったりしたことで「どのようにイモの形をつくるのか？」「どうしたらいいのか？」など友達と考えを出し合いながら制作の意欲や表現する力につながった。

５歳児　『地域の先生とお米作り！』（５歳児５名）

《田植え》
５月中旬、地域の先生に来ていただいて田植えを教えていただく。苗を手渡してもらい３～４本の苗をまとめて植え付けていく。「ちいさいねっこがでてる。」「てがしずんでしまう。」「ぬるぬるして、あったかい。」「あしがぬけない。」など感じたことを言葉にしながら泥の中にしっかりと差し込むことを教わった。何回か経験することで慣れてきて浮かなくなっ

た。「こんどは浮かないね。」「早くおいしいごはんになって食べたいな。」と収穫を楽しみにする。梅雨が終わり、今年の夏は猛暑が続いた。毎日、田んぼの水が渇いていないか気にかけ、水が少なくなるとホースとトイをつなげて水を入れた。草が生えるとお米に栄養がいきわたる様に草引きをした。世話をすることで苗は株が太くなり、穂先に小さな花がついていることに気付いた。夏の終わりには稲の穂が黄色く実り、鳥に穂先の米を食べられないようにと防鳥ネットやキラキラテープで脅しをつくり収穫を心待ちにした。

《稲刈り》
　実った稲を見て「長いなぁ。土にすれそうや。」「お米たくさんついてる。」と自分たちがお世話をした米が実ったことを喜ぶ子ども達。9月末、地域の先生と一緒に稲刈りをする。地域の先生に側についてもらい鎌の使い方を教えてもらいながら少しずつ刈り取った。「かたいな。足にささりそうや。」「もっとたくさん持っても刈れるよ。」とだんだん刈り取る体験が面白くなってきた5歳児の姿が見られる。刈り取った稲は“はさがけ”をし、天日に干し乾燥させることも教わった。

《秋の自然の風景より》
　園の周りの田んぼでは、コンバインで稲刈り作業が行われていて、刈り取られた稲はすぐに脱穀されモミになって出てくる様子を見たりした。園でお米になって食卓にあがるまでには作る人が大事に育て手間をかけることでみんなのごはんになっていることを知ってほしいと手作業で脱穀をすることにした。牛乳パックに稲穂を入れゆっくり引っ張るとモミがしごかれ、溜まっていった。その過程で1本の穂についているモミの数を数えたり、もみ殻を取り除くにはすり鉢とすりこぎを使って取り除き、米は瓶に入れ棒でついて、ぬかを落とし玄米になることを経験から知ることが出来た。

《収穫祭クッキング》
　11 月中頃、収穫した米と園の畑で収穫したサツマイモを使って秋の味覚を味わう機会を設けた。“秋の収穫祭”を計画し、いろいろな活動で教えていただいた“地域の先生”にもお手伝いしていただきながら、焼いもと給食に玄米入りのおにぎりを自分達で握って秋の実りに感謝し、旬の味を味わう体験ができた。生長から収穫、脱穀の過程を体験した米は甘くておいしい米本来の味を知ることができた。子ども達からは「おいしい！」「お外で食べるのはじめて！みんなで食べてうれしい。」「お米ゴリゴリするの疲れたけど、お米を研ぐのは簡単。おにぎりおいしかった！」など素直な感想となって聞かれた。この日は普段小食の子もおかわりをする姿が見られた。地域の方と共に楽しんだ『秋の収穫祭』の場面である。

【評価・反省】
・地域的に田植えを見る機会は多いが機械での作業がほとんどである。田んぼの泥の感触を知る機会や苗に触れる経験も少ないであろう子ども達が、実際に泥田に足を入れ苗を植え、季節を通して稲が育っていく過程を地域の先生と共に観察することができた。また、稲の生長には水を絶やさないことも知った。そして、白米として食べるまでには収穫後すぐには食べられないこと、脱穀、もみすり、精米の過程があること、手で行うとかなりの手間と時間がかかる大変な仕事であることを経験した。これらの過程を経て『収穫祭』で食べた経験は苦労や感謝する気持ち、これからの学びにつながる気付きや発見もたくさん出来、大きな成果につながったと感じている。

・初めは地域の方とのかかわりを恥ずかしそうにしていたが、田植えや稲刈りなど教えていただいたり、畑の植え付けや収穫などにも作業してくださる様子を見て感謝の気持ちを持ち、進んで挨拶を交わしたり、会話を楽しむようになった。

・家庭に同居の祖父母が多い地域であるが、核家族の家庭もあり、地域の方とのふれあいは知識や伝統、文化を継承していく機会である。また敬意をもって接することの経験と、地域の方が温かな気持ちで子どもに接していただいた経験は、人への感謝の気持ちと世代を超

えた人と人の心の通い合いと豊かな情緒の育み、主体的に人・もの・こととかかわり意欲的に活動に向かう力になっていると思う。

５．研究の成果

・園の活動に地域の方を招き、共に活動を楽しむ経験は、子どもにとって“生きる力”の基礎となる人とかかわる力やコミュニケーション力を育むことにつながる。様々な世代の方と親しみをもち、再会を喜び、感動体験を共有し互いに認め合える関係性は“人は頼れるもの”、“信頼できるもの”と心に刻まれていく。また、多様な経験は多様な遊びにつながり、「夢中になる体験」をたくさんすることで「もっとやりたい！」思いとなり、子どもにとっても大人にとっても豊かな資質能力の育成につながると確信することができた。

６．今後の課題

・年々、園児数が減少していく本園の厳しい現状を踏まえ、地域とともに子どもの育成を願い、地域に愛着を感じ誇りをもって心豊かに生き抜く力を身につけてほしい。
そのためには、園の様子を地域に発信し、情報を共有し合い有能な教育力を活動に取り入れていきながら、取り組み活動を工夫し継続性をもって子どもの力に変えていきたい。